

無側枝性ギクの生育開花に関する研究
(第2報)夏秋ギク「岩の白扇」の電照抑制作型における
栽培時期と親株の越冬条件が生育開花に及ぼす影響

松本由利子

香川県農業試験場研究報告 第52号(2000年3月) 55-64

夏秋ギク型無側枝性ギクの電照抑制作型における分枝特性及び生育開花特性と、親株の越冬条件が生育開花に及ぼす影響を調査するため、無側枝性品種「岩の白扇」について、露地、無加温及び加温条件下で養成した親株を用いて苗を生産し、4月から6月にかけて定植を行い、栽培時期の異なる4通りの電照抑制栽培を行った。

- 1.摘心栽培における摘心後の萌芽数は、無加温養成した親株から苗を生産し、5月6日に定植した栽培で最も多かった。
- 2.開花までに摘除を必要とする側枝が発生した節数の、開花茎の全節数に対する割合は、5月28日に定植した栽培で最も低かった。節位別の発生頻度は、花首から数えて3ないし4節位から約40節位までは「精雲」に比較して低かった。しかし、栽培時期によっては、40節位以下の節位の発生頻度は、「精雲」より高かった。
- 3.消灯日の茎長及び切り花長は、「精雲」に比較して短く、摘心栽培では栽培時期が遅いほど短くなる傾向があった。また、無摘心栽培では5月11日に定植した栽培で最も長く、その後は栽培時期が遅いほど短くなった。
- 4.平均節間長は、摘心栽培に比較して無摘心栽培で長かった。露地親株から生産した苗は、加温親株から生産した苗に比較して、栽培時期が早い場合には茎の伸長が優れた。

キーワード:キク,夏秋ギク,無側枝性ギク,岩の白扇,分枝特性